

学校が「平常」に戻るまで

松浦 純子

コロナ流行の開始から二年が過ぎ、ようやく例年通りの新学期を迎えることができた。生徒の表情も心なしか明るく見える。当たり前前のことに感謝しつつ今は授業を進めている。

二〇二〇年二月末に突然首相より学校に対して、三月二日から全国一斉の「臨時休業」を要請する方針が出された。生徒たちはロッカーに詰め込んでいた大量の荷物を学校から持ち帰り、先生たちは学年末に向けて準備していたことが全く実施できず、突然梯子を外されたように慌てた。学年末テストや終業式なしで臨時休業は終わったが、四月初めになると今度は緊急事態宣言が出され、入学式や始業式もできないまま生徒たちの登校禁止は続いた。新学年の教材は教員が生徒一人ずつの段ボール箱に詰めて宅配業者へ渡した。生徒の健康状態を把握するために毎日Zoomで朝はHR、午後は終礼を行っていたので生徒たちもお互いの顔を画面では見ていたが、やはり直接会えない寂しさは伝わってきた。

四月初めから既に毎日一、二時間のZoomによるオンライン授業をしていたが、五月からは本格的に毎日五時間の授業が始まった。生徒も大変だろうなと思いつつも、ひと月遅れて始まった授業を取り戻すために手を緩める暇はなかった。状況が落ち着いていた六月も引き続きオンライン授業が行なわれたが、新たに週一回の登校が加わった。学校で生徒の明るい声が聞こえたのが新鮮だった。そして短い夏休み。何とか二学期を乗り切ると、年明けには再び出された緊急事態宣言の中で入試シーズンへ突入。私の勤務先の中学・高校でも、受験生が萎縮せずに実力を発揮できる範囲での厳重なコロナ対策を行なった。多少過剰ではないかと思ったが、未知の見えないものへの対応とはそういうものだろう。

コロナ流行二年目にはたびたび緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置が出された。四回目の宣言の時に初めてハイブリッド授業をしたが、目の前にいる生徒と画面の向こう側にいる生徒を同時に見ることは難しく、hybridは決してhigh-bleedではないことがよく分かった。

今は生徒が日々安定して平常の学校生活を送れることを期待する毎日だ。